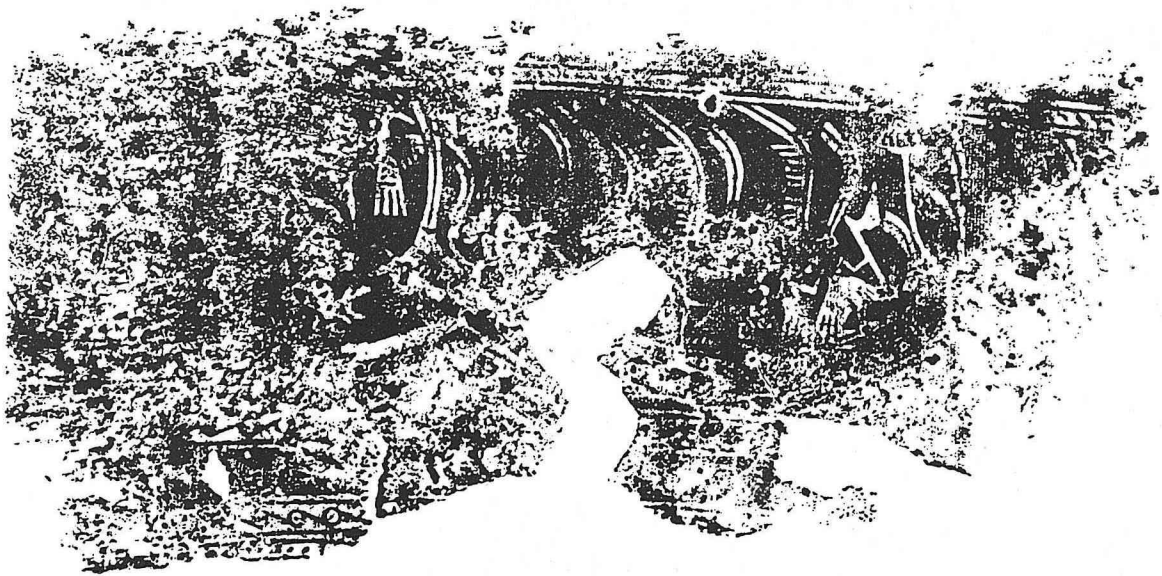
(一) 東山發見桶形銅器（バッショー氏）

(二) 東山發見桶形銅器（ヤンセー博士）

據遠東學院寫眞

第一圖版



東山發見桶形銅器船畫拓影(約實大)

梅原手拓

史林　第二十八卷　第四號　（通卷第百十一號）昭和十八年十月發行

安南清化省東山出土の桶形銅器

梅原末治

一

今から二十年近い前に清化省東山(Dong son, Thanh hoa)で見出された青銅器時代に屬する遺跡は、佛印北部の古文物を攷へる上に劃期的な資料を提示したものであつた。東南アジア考古學の大きな問題の一つである銅鼓の年代を推す上に一つの確かな據所を與へたごときはその一例であるが、見出された諸種の遺物に依つて、當代この地方に榮えた青銅文物の全貌がはじめて明にせられたことなどは中で最も大きな意味を持つものと言ふ可きであらう。是等の發見遺物に就いてはゴルベフ博士(Victor Goloubew)の「東京及安南北部の青銅器時代」①なる論文にそれ〴〵解説せられてゐて、それが爾後の解釋の據るところとなつてゐる。併し重要な東山出土品自體の示す詳しい觀察に至つては、遺跡の發掘が充分な學術的用意を以て行はれたものでない點と相表裏して、右の報文のみではなほ不充分な憾が多く、引いて從來の所論をして隔靴搔痒の感なきを得ない狀況に置いてゐる。私は嚮の佛印旅行の際、幸にも是等の遺品を自由に調査するの便宜を得たので、以下にその中に含まれた一つの遺

物を取り出して所見の一端を錄し、右の不備を補ふことにしたい。この遺物と云ふのはゴルベフ博士が "Situle de bronze" と呼んでゐる桶形銅器である。

二

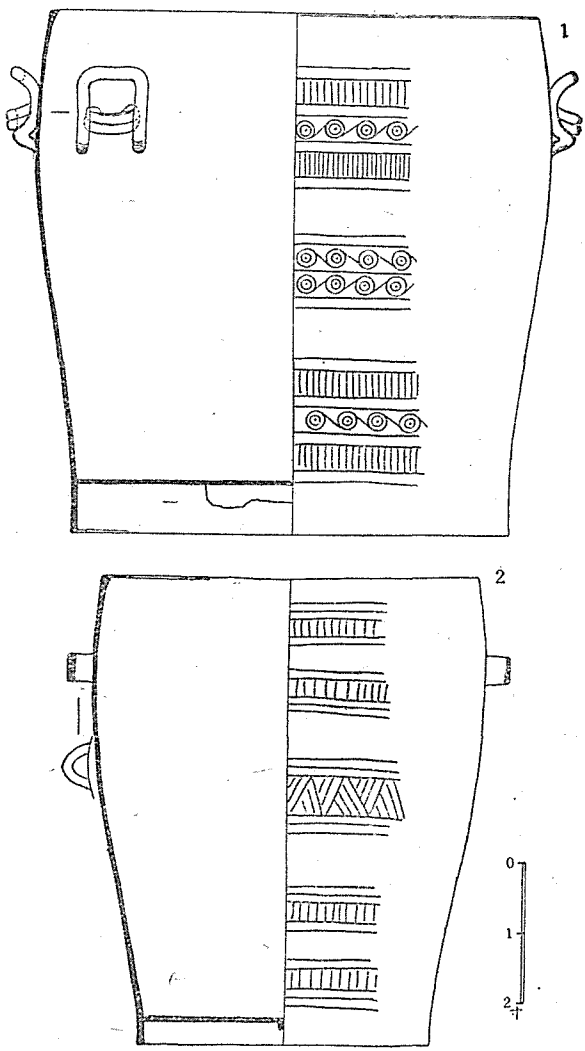
さて私の假りに桶形銅器と呼ぶものはゴルベフ博士が一例を擧げて解說してゐる樣な薄手鑄物の容器であつて、器體は心持ち上の方で開いてゐるが、大體に徑五六寸、高さ七八寸の圓い筒形に近い單純なもので、上緣に近く兩側に一双の把手を作り着けた所、現在行はれてゐるバケツに髣髴としてゐる。ゴルベフ博士は單に一例を示してゐるに過ぎないが、氏も記してゐる樣に遺品は割合に多くて、私の見た者のみでも十指を屈するに近く、うちに昭和十年以降行はれたヤンセー博士(Olov Janse)の同遺跡發掘の際にも出土したこと同博士の略報②に見えてゐる。學術調査の資料を含む是等の遺品は孰れも割合に薄くて、表面に鑄造の際の型の合せ目が目立つて殘つて居り、作りの佳良な類とはなし難い。その粗な外面に

線文を鑄出してゐる點はゴルベフ氏も指摘してゐる如く、同時出土の銅鼓の或者と趣を同じくした所があり、また我が銅鐸の袈裟襷品ともよく似た外觀を呈してゐる。以上の概觀から次に私の見た遺物の中の主なものに就いて更に細部を擧げよう。

第一はゴルベフ氏の擧示した云はゞ典型的な器である③(圖版第一の1)。筒形に近い器の外側は上中下の三段に帶圈を鑄出して、その上下は圓圈帶を中に條線文帶を添へたものであり、中央は圓圈帶二條から成る。而して上帶に近接して一双の左右に開く環狀耳があつて、うちに別な上下に孔の通じた小耳を作り添へてゐる。なほこの器では鑄造後上緣を削つた形迹のある點や、側面に切り傷のあることなども擧ぐ可きであらう。

第二の器また相似たものながら、外側の鑄出し文は稍々手が込んでゐる。卽ち三段の帶圈中に於ける圓珠は孰れも同心圓から成つて、それを斜線でつないだところ、銅鼓文に多く見るものに同じく、それが整つて鑄出されてゐる。次に一双の把手も似てはゐるが、口緣からやゝ

第一圖　東山遺跡發掘桶形銅器形狀圖



下の方に着けられて、曲つた形をしてゐること圖示（第一圖の1）の如くである。なほこの器は上げ底となつてゐて、その外側中央に大きい鑄口の迹のあるのをも記さねばならぬ。

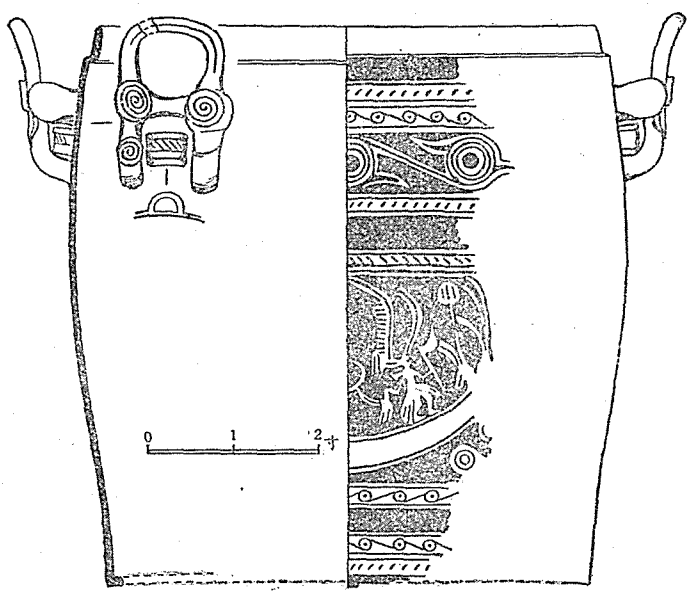
第三はヤンセー博士が昭和十年から十一年に亙る第二回の同遺跡調査の際住居阯から發見した器である。これ

は鉛銅色を呈し、形が歪んでゐるばかりでなく、その表面の文樣が粗大に鑄出されて整ふて居らず、中帶が一種の編物狀帶から成つて、圓圈を缺くし、またその兩側の把手も單なる山形の簡單なものを橫位置に着けてゐる（同圖の2）。但しこの器中にも別個の小さなゴルベフ氏の所謂痰壺形容器④と銅鉾、鋤形銅器等が納められてゐて、今もそのまゝであるのは注意すべきであらう（圖版第一の2）。第四はその前年の調査の際またヤンセー博士の發見したもので、これも著しく歪んでゐるが、第二の器に似て、外側の圓圈文は單圓に斜線を添へつないだものである。尤も表出は明瞭でない。第五も第三と同じ際に出土した器であつて、下邊殘缺してゐるが、これはうちに頭蓋を納めてゐた點で興味を惹く資料とする。表面の圖文帶は第三に近く同じく粗大であり、その把手は第二の器に近い。

第六は東京帝國大學文學部所藏のもので、永田安吉氏の蒐集に係る。出土地の所傳を缺くが、その示す所上記第四の器に極めて近く、延いて又東山の出土品と解して誤りはあるまい。これは本邦現存品たるの故を以て容易に實物を觀得る便宜がある。爲に特に擧げる次第である。なほこの器を載せた同大學の『考古圖編』第十輯の解說には「器中に許多の五銖錢が入つたまゝ發見された」とあるのは、編者も云ふてゐる樣に、その製作年代の支那漢代に相當るべきを示す重要な事實とする。同じ大學所藏の永田安吉氏の蒐集品には右の一器の外に今一つ同じ容器の極めて小さい遺品——高さ一寸一分五厘に過ぎないものがある。ゴルベフ氏の論文にも見える樣に東山の遺跡からは銅鼓や痰壺形容器には實用品の外に小さな假器（明器）の並存が注意せられてゐる。處がベケツ形のこの種銅器ではその例はなほあまり知られない樣である。さればこれは珍らしい遺品と云ふ可きである。勿論他と同樣副葬の爲の明器として作られたものであらう。

以上の諸例は細部に於いて必ずしも同じでないが、通じては同一の範疇に入る可きものたること一見して明である。これがゴルベフ博士をして單にその一例を圖示して全般を推し得ると考へしめた所以に外ならぬ。而して

その薄手の青銅作りの粗な地肌は、圖文と併せて同じ所から出る銅鼓など、同巧異曲の遺品たるを思はしめるに充分なものがある。されば從來この器に關する限り、常に右の點が擧げられて來たのであつた。處が是等の遺品を藏した河內フイノー博物館(Musée Louis Finot)の東山室の陳列を見學してゐる際、筆者はふとその中に同じ形をしてはゐるが表面の地肌に滑澤のあるやゝ外觀の違つた器が、銹に覆はれながら陳列棚の上邊に置かれてゐるのに氣附いた。そこで取り出してもらふて仔細に調べて見ると、下半に破損が多い爲に見榮のしない器ながら、先づもと上に外被せの蓋を受けたと覺しい作りのあることが認められるのみならず、器體が通じて幾分か厚く、また上邊の左右にある把手の作りが頑丈で大きく、その上に渦文や帶文が鑄表はされてゐるなど細部の違ひが可なりに著しい事が分明した。更にこれ等に加へるに器の側面を飾る裝飾文は同じく鑄文ではあるが、突線から成るのでなくて、沈凸文であつて、その上中下三帶の幾何學文の間に、更に鑄沈文を以て複雜な文樣なり繪の



第二圖　東山遺跡發見船の繪のある桶形銅器

あることが注意せられた。そこで丹念に堅い銹を除いて本來の圖像を調べて見た結果、下方から人物のゝつた船の圖が現はれて來て、それが三つで全面を被ふてゐると云ふ珍らしい事實を究めることが出來たのであつた。（第二圖）

尤もこの船の繪は單に銹で覆はれてゐた爲に注意を惹かなかつたばかりでなく、本來の鑄上りが悪くて、型流れで消えた部分が多く、それに加へるに破損を以てしてゐるので、相近い三つの圖樣を通じて而も遂に本來の形を明確に線で描き得るに至らなかつたが、併し圖版第二の拓影で見る如く、それは明に舳と艫の兩方に飾のある船を描いたものであつて、船上に鳥の羽根を着けた四人の人物が乘込み、艫の一人が櫂を執つて船をあやつゝて居り、舳の一人が武器を執つて立つ姿が可なりはつきりとして認められる。そしてこの人物の持つ武器が沓形銅斧を着けた特色のあるものなることが知られるのである。この圖たるや改めて言ふまでもなく有名なゴク・リユ（Ngoc-lu）の遺品以下の古い銅鼓文に見える船の圖と趣を同じくするものであり、また人物自體の表現は右の銅鼓圖なり沓形銅斧の或者の面上に表はされたそれに一致する。この古い銅鼓文との同似は別に上中の帶間に表はされた圖文（第二圖）に於いても認められるのである。か樣な圖文の類似から、はじめに記した銅の地肌なり、作り等が又右の銅鼓類と相等しい點が改めて顧みられて、兩者の緊密な關係が推されることになる。然らばこの器は同じ桶形銅器の間にあつては、他の多くの通有な器と可なり違つたものとなつて、右の他との同似が器の性質なり年代を推す上に新しい示唆を與へる事が考へられて來る。これについては次に改めて說くであらう。

三

以上東山（ドンソン）遺跡出土品に見られる現在のベケツを思はせる桶形銅器に就いてその通有品を擧げ、更に新たに注意した珍らしい圖樣のある一例を稍々詳しく記して、それ自體を解說したのであるが、さてこの銅器に於いて認められる一つの著しい點は、か樣な器形が從來なほ他の地

域で遺存する事の知られてゐないことである。北部佛印に於ける青銅使用の知識が支那の中原から波及したものなるべきは今日多くの學者の一致する見解であるが、その支那に夥しく遺存する古銅器には殷周から漢器を通じて、なほこの樣なものを見受けない。か樣な點からすると東南アジアの特殊な青銅文化所產とする銅鼓が支那の南半で見出されるのに較べて、一層北印に特有な色彩の强いものたるの觀を呈する。これは作り其他が銅鼓と同巧異曲な點と併せ考へることに依つて、自ら金屬文化の行はれた際、銅鼓同樣その地で作られた器とするの解釋を加へしめるものである。然らば本銅器の祖型なり性質は當然その見地から考へらるべきことになる。

その樣に明記はしてゐないが、ゴルベフ博士はこの銅器の性質に就いて、同樣な竹などで編んだ器が現在もなほモイ(Moi)族やダヤク(Dayak)族の間に行はれてゐる點に注意して、それから器形が同地で行はれてゐた籠製品を銅で寫し作つたものとなし、更に用途に就いても、彼等が現在右の籠をば負籠の代りに使用したり、またそれに粃を蓄へなどしてゐる點よりして、同樣な容器として、その墓室內の副葬は蓋し被葬者の糧食を蓄へる用に供せられたのであらうとしてゐるのは、如上の見地に立つ解釋に外ならぬ。博士がその爲に擧げてゐるダヤク族の竹籠は如何にも問題の銅器と似た趣が多くて、それを首肯せしめるものがある。[6]

但し他方に於いて器形が若干の胴張りを示しながら圓壔形をして、上げ底のものがあり、又側面の上中下に帶文を繞らす點などからすると、現在我が國に行はれてゐる木製の桶との形の一致が自ら擧げられるから、北印が由來木材の多い地域なるに顧みて、その點が同じく考慮せらる可きことを思ふのである。これと共にその用途に就いても、土俗品からの單なる推測の外に、上擧の諸例中に頭蓋や、武器・古錢等を容れたものがある事から、か樣な用に供せられたことが現實に確められる以上、單に穀物を蓄へたとのみに限る可きではなく、容器としていろ〳〵に用ゐられたとせらる可く、その數の多いことは本來この樣な實用の器として作られた爲に依るもので

あらねばならぬ。なほこの點で、上邊の兩側にある耳の多くが、持ち上げるに恰好な左右に開く環狀のものゝ間に、更に上下に孔の貫通したものを添へてゐることが、器の用途に基くものとして、或は兩者を通じて、上に被せた器の被ひを結びつける際の用意を示したとも解せられることをも記すべきであらう。か樣に見て來ると本銅器は銅鼓に對して實用の容器として作られたものたる性質が改めて顧みられることになるのである。

次にこの種銅器の作られた時代に就いては、それの出土する東山遺跡が、うちに存する鏡・古泉・銅器等の支那の遺物の性質から漢代盛時に當ることがゴルベフ博士に依つて說かれて、それが銅鼓の年代を定める上に重要なものとなつてゐる。博士の右學例に關する限り、一個の銅劍や壺等では時代を下し過ぎてゐるが、鏡・古泉等の支那舶載品の年代觀は誤りがないから、從つて本銅器もまた自ら時代の一端が推さる可きことになる。この場合上に記した通有な器のうちに五銖錢を容れた例の存する事實は、それを裏書きするに役立つものとなるであらう。併し他方に於いてゴルベフ氏の東山遺跡の實年代觀とそれに基く銅鼓の古い式の年代に關しては、早くハイネ・ゲルデルン氏[7](R. Heine-Gelden)などの反對說が公にせられ、また最近更にカールグレン教授(Bernhard Karlgren)に依つて[8]東山遺跡出土品中に支那の淮河式——吾々の云ふ戰國樣式の特徵を具へたものゝ存する事から時代の遡るものがあるとする主張を見るに於いて、再檢討が要請せられるのである。

今改めてゴルベフ博士の擧げてゐる所に就いて觀るに、出土の遺品は可なり多種多樣であつて、支那の漢盛時の遺品と同時性が考へられるものゝ外に、カールグレン教授の指摘する如くそれよりも確かに古調を帶びた遺品を含み、支那の遺品にあつても右に應ずるが如く、今日の知見からすると明に戰國時代に遡るべき上記銅劍[9]や銅壺等を見受ける點から、全體をば同一に取扱ふことの難きを思はしめる。そしてこの事は更に東山遺跡の發掘がもと〳〵充分な學術上の用意を缺いて、遺物の蒐集を主とした傾向が強く、多數に發掘せられた個々の遺跡に

就いての共存遺物の狀態が明確でない點から、嚴密な意味で全體を一つの地域的な一括遺物と見るの外ない實情にあるに於いて、か樣な多樣性の遺物のすべての時代を、一部に見受ける漢器を以て律するの當らざることが強く意識されて來る。尤も筆者はこの小編で深く右の點に立入る餘裕がなく、それを別の機會に讓るが、この樣な場合出土品中に見る各個に就いての比較考察に依つて遺物の先後が決せられ、それ等を通じて改めて東山遺跡の年代觀が推さるべきであること蓋し多くの疑議はないと考へる。この點でゴルベフ博士が東山遺跡出土の銅鼓がヘーゲル分類の第一型式に屬する古式であることから、同じ北部佛印の有名なゴク・リュ銅鼓以下の一類と同一視して、この種第一型式銅鼓の實時代を漢盛時にあるとした所說に對しては、實物に卽した用意を缺くものであり、反對の見解を生じことは至當と言はざるを得ない。何となれば是等の銅鼓の示す處、大まかに見れば固より同類たるに間違ひはないが、細部になると、銅の地肌なり鑄工合等で相當な違ひがあるのみならず、表はされた圖文に於いてはヤンセー博士の發掘品の示す所、通じて便化の度が著しく、人物圖の如きは全く頭部の羽狀飾のみが誇張化せられ、ゴク・リュ銅鼓に見るそれとの間に著しく違つて居り、表出の模樣も同一視し難いからである。こゝで兩者の間に見る差異が恰も上に述べた本銅器に於いて通有品と新たに見出した一器との間に於けると相似てゐることがまた認められるであらう。して見ればこの樣な違ひは、銅鼓に於ける文樣便化の形式學的研究から、東山出土の銅鼓や本銅器の多くのものが漢盛時に並行したものとして、ゴク・リュ銅鼓等はそれよりも時代の遡ることが認められて然る可きと思ふ。然らば新たに注意した船の繪のある一個の銅器[10]は、同じく時代の遡るもので、東山遺跡では戰國時代に屬する銅劍、銅壺等と並行したと見る可きことになるであらう。

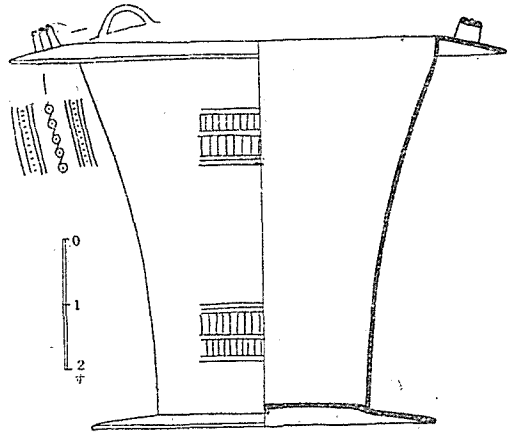
四

前段に述べた所見が幸にして大過がないとすれば、從來簡單に考へられた桶形銅器にも、新しく注意した一器

を通じて、銅鼓に於けると同じく、作られた時代に幅のあることが考へられて、その遡る類に於いて銅鼓の古いものと並行することが知られるわけである。一體北部佛印の青銅器時代なるものは、東山遺跡の發掘が大きな波文を投じて、多數の出土品に依つてその性格が明瞭になつたと共に、他方に於いてうちに注意せられた若干の漢代遺物の示す時代のみが強調された觀がないではない。併し實際では各地から出土してゐる關係の遺品は相當な分量に上つて、別に利器形其他に於いて形式の先後を考へ得るものを含んでゐる。この小編は容器に於いて從來單一に取扱はれたものゝうちに、同樣な點のあることをたま〳〵見出した一例から推考して、新たなる考察の要を示唆せんとしたものに外ならぬ。

終りに北部佛印で作られたと認むべきこの一種の容器に於いて、別に筆者の注意を惹いた一つの點は、その示す一方の船の圖のあるものが、本邦に於ける第一並に第二型の古式の銅鐸と種々の點で同じ趣を具へてゐるに對し、他の多くの器が圖文の表現其他で袈裟襷鐸の大形品

と一致して、型式の先後に於いて並行するものがあることである。處が、銅鐸と本銅器は各の實時代に於いても現在の知見の示す所大體差異がない樣である。兩者が時



第三圖　東山出土瘦壺形銅器形狀圖

と經過とを同じくしたと見るべき右の點が、同じ支那の金屬文物の影響の下に生じた單なる偶然の事象とすべきや、將たまた日本と北部佛印とに於いて文物を享受した

際に於ける、同一のか様な受容形態を可能ならしめる背景の存在を考ふ可きであるか。この點が從來行はれた單なる外面的な一部の類似のみで銅鼓卽ち銅鐸の祖型となす様な見方と離れて、新たに吾々の關心に觸れるものがあることに思ひ及ぶのである。

(註)① Victor Goloubew; L'age du Bronze au Tonkin et dans le Nord-Annam, (Bulletin de l'Ecole Française l'Extrême-Orient, T. XXIX, 1929)

② Olov Janse; Rapport préliminaire d'une Mission archéologique en Indochine auprès de l'Ecole Française l'Extrême-Orient (Revue des Arts Asiatiques, T.X. 19)。尤もこれは第一回の調査の概報である。以下の遺物に就ての本文での記述は遠東學院の記錄に基いたことを註記して置く。

③ こゝに收めた二つの寫眞は遠東學院寫眞室の原板に據つたものである。その負ふ所を明記して置く。

④ この器名は假りにゴルベフ博士に從ふたのであるが、それからでは正しい形の概念は得難い。依つてこゝにその一器の實測圖(第三圖)を揭げて實際を紹介することにする。器の作りは本文錄した桶形銅器の通有品と全然同樣であつて、薄手作りの器の外側や上面の鍔形條にまた同じ文樣を鑄出して居り、同時の製作たるを示してゐる。桶形銅器と同じく遺例が多く、現在また他に同形品を見出し得ない點で、同一に取扱はるべきものと思はれるのである。

⑤ 是等の同似はそれ〴〵の圖を示して一目瞭然たらしむべきであるが、時局下挿圖の制限に依つて、それが出來ない。註①のゴルベフ氏の論文に揭げてある圖、並にそれの轉載せられてゐる松本信廣教授の『印度支那の民族と文化』關津正志氏の『印度支那の原始文明』等の參照を得ば幸である。

⑥ Victor Goloubew; ibid, Fig. 10 參照。

⑦ Heine-Geldern; Bedeutung und Herkunft der Metalltrommeln (Asia Major, Vol, VIII, fasc. 3. 1932)

⑧ B. Karlgren; The Date of the Early Dong-sôn Culture (Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities, No. 14, Stockholm, 1942)

⑨ この銅劍はゴルベフ博士が從來の支那學者の所見を排して漢代のものとしてゐるが、現時の支那考古學の常識からするとカールグレン教授も指摘してゐる樣に同代以前に遡ること疑問はない。特にこの劍の身に印してゐる斜格子狀の文樣の具合は戰國式銅器の特徵の一つに數ふ可きものであることが時代を示す據所として擧げらる可きである。これと同じ文樣のある銅劍が我が根津美術館に收藏されてゐる。(『青山清賞』古銅器編參照)

⑩ 本文では要旨の關係から、それに論じ及ばなかつたが、

こう云ふ實用の容器たる桶形の器に銅鼓と同じ船の圖を見出したことは、船の圖が葬儀の船出を表はし、引いて銅鼓の性質をも葬儀用のみと解するゴルベフ氏の所見の當らない事を示すものであることをこゝで附言して置きない。なほ桶形銅器は古墓ばかりでなく既記三の例の如く東山では住居阯からもヤンセー博士が發掘してゐること右と聯關して併せ記す可きである。

〔別記〕

本文で論じた遺物の出た東山遺跡の一斑はヤンセー博士の概報に依つて知り得るのであるが、遺跡地はソンマ(Sông Ma)河の流れと、その西に近接して南北につづいた小山との間の帶の樣な地區であつて、東山の部落からは西南に當つてゐる。現在その河岸は高さ二間位の崖狀を呈して、河水の浸蝕に依つて可なり削られたことを思はしめるが、それにしても元から狹い所である。こゝで見出された遺跡の主要なものは多數の銅製副葬品を伴ふた墳墓であつて、これは現在畑地となつてゐる部分の地表下約一米位の處に存してゐるが、別に河岸に近い處では住居阯と認む可き遺構も檢出せられた。この方からは銅器・土器の外に木器片なども發見されてゐて別個な興味を惹くのである。なほ東山に於ける他の著しい遺跡たる漢から唐宋に亙る古墓の密集する地帶は、右の部分からは北方數丁の、前にやや廣い沖積低地をひかへた小山の西腹一帶であるが、前者にも時に唐代の塼墓などが並び存することヤンセー博士の報文に見ゆる如くである。餘白が出來たので筆者の實査の所見を簡單に擧げて置く。